

# 作品に付き添う作家

終わりになく開かれた作品との対話

安原 伸 一 朗

モーリス・ブランショ著

他処からやって来た声

デ・フォレ、シャルル、ツェラン、フーコー

本書は、モーリス・ブラ

ンショが、ルイールネ・デ・フォレ、ルネ・シャル、パウル・ツェラン、そしてミシェル・フーコーを論じた文章を一冊にまとめた選集の日本語訳。

ブランショといえは、『文学空間』にせよ、『終わ

りなき対話』にせよ、刊行された書物をめぐってそのつと雑誌に発表した評論から、初出時の情報を削ぎ落として修正を加えたうえで、個々の文学作品というよりは、いつの間にか文学そのものの可能性を問う書物にまともな批評家である。そのような姿からすれば、本書末尾で、ブランショがその「知的友愛

に忠実であり続けている」と呼びかけるフーコーをはじめとして、対象となる四人への近さが際立つ本書に

は、拾遺の感も漂う。とはいえ、本書でのブランショの歩みもまた、作品との執拗な対話を通じておのれの思想を練り上げていくものにほかならない。とりわけ、「語れ、おまえもまた、たとえおまえが最後に語る人だとしても」と、ツェランの詩を引用しつつ、その詩作の核心をこの一つの命令形で射通す評論「最後に語る人」では、ブランショの地の文とツェランの詩編とが見分けのつかないほどに絡み合い、作品の同伴者としてのブランショ、作品との対話を通じて語り続けた批評家ブランショの面目躍如といった感がある。

そしてそれは、死は精神の生であるというヘーゲルの命題をすらしながら、「遠く、すでに中性的で、それどころか非人称的な一人の「私」を認めない限りデ・フォレを読んだことにはならない」と述べて、「存在しなことがないがゆえに、つねにすでに失われてしまった一つの現在」としての、自らのうちの物言わぬ幼児「インファン」をめぐる読解を、デ・フォレの詩に施すブランショ。および、シャルルの詩のなかから「ある始まりをしない言語活動の決断のうちで、われわれにとつておおよそ最も近くおおよそ最も直接的な運命の中に賭けられているものが、親密なかたちでわれわれに語られている」の聞き取って、そこに原初の言葉の闘いを読むブランショの身振りにも通じている。

このように、作品に付き添う作家としてのブランショの姿は、しかし、「ミシエル・フーコー わが想像のうちの」と題された追悼文にいたって、いささか趣を異にするかに見える。もちろん、ブランショがフーコーを高く評価し、その主著が刊行されるたびに時評を発表する一方で、フーコーの方も、『外の思考』に代表される重要なブランショ論を公にするだけでなく、若い頃はブランショになりたかったと述べるほど、ブランショからの大きな影響を認めていた。そして本書で、フーコーの道程を振り返るブランショもまた、真理への意志に対してフーコーが「ニヒリズム的な警戒心」を抱いているな

どといった類のさまざまな誤解を丁寧に解いていき、彼を「危険に晒された人だった」として弁護する。

とはいうものの、『狂気の歴史』では、ブランショのサド論に大きく依拠しながら作家サドを論じていたフーコーが、『知への意志』において、サドについて「血が性を吸収してしまつた」と断じたのを目の当たりにしたブランショは、きわめて直截に「私を驚かす結論である」と本書に記して、珍しく戸惑いを隠さない。ブランショによれば、サドは性の至高性を樹立しているのだが、というわけだ。あたかも、系譜学に軸足を置いたフーコーには、文学が一つのコーパスとして映るようになったのに対して、ブランショはあくまでも、文学のインパクトに賭け続けているかのようである。

他人がなかなか容喙できないかと思われほど親密かつ峻厳な、作品とブランショとの対話は、実のところ、このように、互いを肯定し合うことで閉じられることはない。それどころか、その対話は、終わりになく開かれていく。今年はブランショ没後十年。今後、ブランショの作品との対話は、いや増しにいろいろな形で続けられていくことだろう。(守中高明訳) (やすはら・しんいちろう氏) 日本大学准教授・フランス文学専攻

★モーリス・ブランショ

(一九〇七～二〇〇三)

はフランスの作家・批評家。同時代の作家・批評家・哲学者に多大なる影響を及ぼす。著書に「アミナダブ」「至高者」「文学空間」「来るべき書物」など。



人文科学と未知なるもの  
20世紀を代表する思想家・モーリス・ブランショの思想を、現代思想に即する「未知なるもの」の領域から探る。人文科学界の巨匠として、文化・思想・政治・経済・社会の諸問題を鋭く洞察した著作。

四六判・210頁・2940円  
以文社  
978-4-7531-0310-2